

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5852 参照



※ P5866 参照



※ P5866 参照

2023.9
No. 770

目次

[大学の動き]

- 学童保育所を12月に開設 5852
- 京都大学ここのえ会主催 第1回キャリアイベントを開催 5852

[部局の動き]

- 国立大学法人八大学文学部長会議を開催 5854
- 第25回リカレント教育講座「『心の教育』を考える
-現代の子どもをめぐる“暴力”-」を開催 5854
- 京都大学研究資源アーカイブが「佐藤幹夫関係資料：
講義ノートおよび講義録音，1984-1986」を公開 5855
- さくらサイエンスハイスクールプログラムで海外の
高校生が来学 5857
- 2023年度夏季アジア未来リーダー育成奨学金
プログラム（AFLSP）成果報告会を開催 5858
- 「京都大学宇治おうばくプラザ 第12回たそがれ
コンサート」を開催 5859

- 宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、
夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催 5860

[寸言]

- あの日に帰りたい 平松 哲郎 5863

[随想]

- 松本亦太郎博士の贈り物 -hippのクロノスコープ-
名誉教授 苅阪 直行 5864

[洛書]

- 未開発の太陽光で社会を照らす 坂本 雅典 5865

[話題]

- 学術機関の認証連携基盤に関する表彰
「IdP of the Year 2022」を受賞 5866
- 経営管理大学院が国際認証規格「EQUIS」を取得 5866
- 硬式野球部が秋田市で災害ボランティア活動に参加 5867



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

学童保育所を12月に開設

ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン推進の一環として、教職員の研究または業務、学生の学業と子育ての両立を支援するため、2023年12月に学童保育所 京都大学キッズコミュニティ (KuSuKu) を設置します。

この学童保育所は、土曜日・日曜日・祝日および小学校の長期休み期間に開設し、子どもたちが安全・安心に過ごせる場所を提供すると同時に、本学の教育・研究を最大限活かしたアカデミックプログラムの提供を通じ、子どもたちの考える力や探究心を伸ばします。

【関連リンク】

詳細は、以下のページをご覧ください。

京都大学男女共同参画推進センター

<https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/support/care/community/>



外観パース



ライブラリー



遊戯室



ミニホール

(人事部(職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)

京都大学ここのえ会主催 第1回キャリアイベントを開催

京都大学ここのえ会(以下「ここのえ会」という。)は、「京大卒女性が語るキャリアストーリー～悩める京大生が進路を切り開くための2時間～」を、6月10日(土)に国際科学イノベーション棟シンポジウムホールにて開催しました。

ここのえ会は、本学出身の女性が学部や研究科の枠を超えて交流しながら、本学の男女共同参画推進事業や女子学生、女性研究者などへの緩やかな支援を行う同窓会として、2021年11月に設立されました。

大学の
動き

冒頭、浅山理恵 ここのえ会会長（SMBCオペレーションサービス株式会社）から挨拶があり、続いてパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションでは、野崎治子 ここのえ会副会長（京都大学）がモデレーターを務め、ここのえ会会員の飯田順子氏（株式会社島津製作所）、櫻本真理氏（株式会社コーチェット）、多和田容子氏（三井物産株式会社）の3名がパネリストとして登壇しました。パネリストは自己紹介の後「就職や進学、その後の人生の転機において、どのような考えに軸を置き、決断してきたのか」について語り、最後には、これから活躍し、より良い人生を送るためのメッセージを学生に送りました。多くの学生たちは、パネリストが語るエピソードやメッセージに真剣に耳を傾け、熱心にメモを取るなどしていました。

続いて、お茶やお菓子を楽しみながら行われたカフェトーク（座談会）では、1班当たり会員4～5名、学生3～4名の少人数のグループに分かれ、学生から寄せられた質問や相談に対して、ここのえ会会員が自身の経験をもとにアドバイスやメッセージを送りました。時には笑いが起こり、時には真剣に語られるなど、どの班も話が途切れることがなく、閉会後も、学生がここのえ会会員に話しかけたり、名刺を交換したりする場面が見られました。

参加した学生からは、「女性に限定したキャリアセミナーは初めてでした。働いている女性が珍しくない時代にはなりましたが、具体的なキャリアモデルはまだ浮かびにくい現状で、さまざまな働き方をされている先輩方のお話を聞くことは本当に参考になりました」とや「2時間があっという間に思える、非常に楽しくて学びになる会でした。パネルディスカッションでは、ここのえ会の方々のキャリアの積み方やお仕事に対する姿勢を知れてとても刺激的でした」などの感想が寄せられました。



パネルディスカッションの様子



カフェトークの様子

(渉外部 (渉外課))

[目次に戻る ↗](#)



国立大学法人八大学文学部長会議を開催

第71回(令和5年度)国立大学法人八大学文学部長会議が、本学文学部を当番校として、6月2日(金)に文学部校舎にて開催されました(幹事:文学部長 木津祐子 教授)。

本会議には、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、大阪大学、広島大学、九州大学および京都大学の各文学部長、ならびに大阪大学人間科学部副学部長(オブザーバー)が出席し、協議事項「生成系AIの急速な普及が人文学の教育・研究に及ぼす影響について」、「研究不正防止対策としての研究データの保管について」、さらに全8項目の承合事項について、各大学の状況が紹介された後、意見交換が行われました。

また、文部科学省からは、高等教育局国立大学法人支援課の小川 優 課長補佐が出席しました。小川課長補佐から「国立大学法人を取り巻く最近の状況について」と題して説明があり、質疑応答が行われた後、活発な意見交換が繰り広げられました。

本会議は、第67回(平成31年度)以来、4年ぶりの対面での開催であり、今後の各大学における取組みにとって、大変有意義なものとなりました。



八大学文学部長会議の様子



集合写真

(大学院文学研究科)

[目次に戻る](#)

第25回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－現代の子どもをめぐる“暴力”－」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家(幼・小・中・高校教諭、養護教諭、児童養護施設関係者、心理臨床専門家など)を対象に、研修活動の一環としてリカレント教育講座を開催しています。本講座は、不登校、非行、いじめ、発達障害など、現代の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることを狙いとしてこれまで開講しており、毎年全国から教諭や臨床心理士などの専門家の参加を得てきました。

第25回となる今回は、「現代の子どもをめぐる“暴力”」を全体テーマとして、7月30日(日)に百周年時計台記念館において開催し、約80名が受講しました。

午前の部では、「現代の子どもをめぐる“暴力”」をテーマとしたシンポジウムを行いました。シンポジウムの前半は、教育現場や司法領域における臨床に造詣の深い、村瀬敏則 京都府総合教育センター教育相談部長、小松正明 あいち発達障害者支援センター主査をシンポジストに迎え、講演を行いました。「暴力」と捉えられがちな子どもの言動、あるいは文字通りの「暴力」

部局の
動き

的言動やその背後にある心の動きや背景についてどのように捉えられるかということや、支援者としてどのような関わりができるか、その際に必要な視点についてなど、幅広い視点からの話がありました。シンポジウムの後半には、受講者を交えた質疑応答の時間を設け、教諭や心理職、福祉職などさまざまな立場から重要な観点についての質問が多く寄せられ、ディスカッションが活発に行われました。

午後の部では、4つの分科会に分かれ、教育現場における心の問題に関する事例研究を行いました。臨床教育実践研究センター教員や同センター国内客員教員などが講師を務め、教育現場における個別事例を素材として、受講者と講師との間で様々な意見が交わされました。

参加者からは、「難しい事例でしたが、先生の解説のおかげでより深く理解することができ、有意義な時間でした」、「さまざまな方の意見を聞くことができ、自身の臨床の参考としていきたいと思いました」などの感想が寄せられました。

本講座は、教育現場における心の問題についてじっくりと検討していく場として、来年度以降も引き続き開催していく予定です。



村瀬部長、小松主査による講演の様子



会場の様子

(大学院教育学研究科)

[目次に戻る](#)

京都大学研究資源アーカイブが「佐藤幹夫関係資料：講義ノートおよび講義録音, 1984-1986」を公開

京都大学における教育や研究のプロセスで収集または作成された資料群を、アーカイブズとして永続的に学内外で利用可能にする取り組みである京都大学研究資源アーカイブが、「佐藤幹夫関係資料：講義ノートおよび講義録音, 1984-1986」を公開しました。

佐藤幹夫 名誉教授は、代数解析学と呼ばれる分野を構築し、朝日賞、日本学士院賞、藤原賞、ショック賞、ウルフ賞などを総なめにした世界的な数学者です。佐藤名誉教授は、ソリトン方程式のモジュライが無限次元グラスマン多様体になることを看破し、その理論を1984年度から1985年度にかけて本学で講義しました。本講義は、多くの若手数学者を鼓舞し、その後の理論発展につながった歴史的な名講義でした。講義録はすでに数理解析レクチャーノートとして刊行されていますが、今回公開した資料は、その当時の講義を筆記したノートおよび録音であり、レクチャーノートには収録されていないさまざまな話が、佐藤名誉教授の肉声とともに収められており、歴史的な価値を持つ一級の資料といえます。



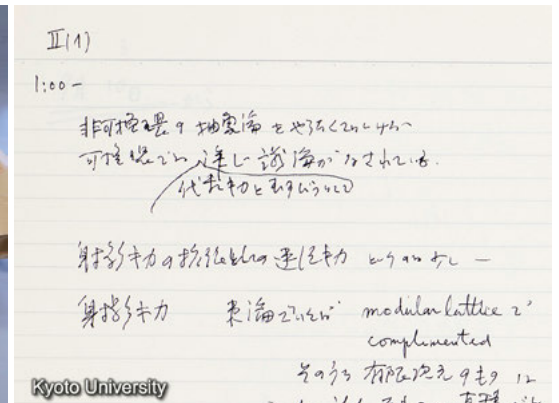
[出所・資料作成] 佐藤幹夫; [筆記] 梅田亨, [録音] 松本茂樹
 [資料年代] 1984年度～1985年度 (1984年4月～1986年2月)
 [資料所蔵] 京都大学数理解析研究所図書室
 [目録作成] 2023年
 [数量] 全体 54件 (講義ノート 20冊、講義録音 28本、講義録編集関係資料 6件)
 [メタデータ] 60レコード
 [利用条件] 本資料は、学術利用・教育研究利用の目的で利用できます。
 [検索手段 (Peek)]

Peek 京都大学デジタルアーカイブシステム

<https://peek.raa.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar225933.225933>



講義ノートと講義録音 (カセットテープ)



佐藤 特別講義 '85 (5), [資料番号] 講義ノート 14, 18p. 1985 年度 2 学期 第 1 回 「非可換環の抽象論をやらなくてははいけない」



[カセットテープ 3] 1985 9/24 M. Sato (A 面のみ), [資料番号] 講義録音 3

【関連リンク】

京都大学研究資源アーカイブ

<https://www.raa.museum.kyoto-u.ac.jp/>

佐藤幹夫関係資料：講義ノートおよび講義録音, 1984-1986.

<https://www.raa.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/3330/>

(総合博物館)

[目次に戻る ↗](#)



さくらサイエンスハイスクールプログラムで海外の高校生が来学

7月13日(木)にさくらサイエンスハイスクールプログラムの訪日団を受け入れ、大学紹介や研究室訪問などを実施しました。

さくらサイエンスハイスクールプログラムは、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が主催し、海外の優秀な高校生を招へいて、日本の最先端の科学技術やトップの科学者と接する機会を提供するプログラムです。今回は、インド・モンゴル・ソロモン諸島から高校生・引率教員合わせて51名が参加しました。

はじめに、宮川 恒 副学長(国際高等教育院担当)が歓迎の挨拶を行い、その後、留学生支援課吉田カレッジオフィス総括掛の職員が本学および Kyoto iUP (Kyoto University International Undergraduate Program) の紹介を行いました。続いて、SCHMOECKER Jan-Dirk 工学研究科

准教授、KHAYYER Abbas 同研究科准教授が、工学部地球工学科国際コース(ICP)について説明を行いました。また、留学生2名が京都大学での体験談を披露しました。

その後、高校生は3つのグループに分かれ、吉村成弘 生命科学研究科准教授、奥村英之 エネルギー科学研究科准教授、川山 巖 同研究科准教授の研究室を訪問し、研究機器や実験装置を見学しました。高校生は、教員からの最先端研究についての説



SCHMOECKER 准教授・KHAYYER 准教授による ICP についての説明



高校生との質疑応答の様子



吉村准教授による研究室紹介の様子



奥村准教授による研究室紹介の様子



川山准教授による研究室紹介の様子



明に熱心に耳を傾け、実際に研究の様子を見学し、大いに感銘を受けた様子でした。

最後に、高校生は杉浦邦征 工学研究科教授による説明のもと、百周年時計台記念館の免震構造を見学しました。高校生は、大地震の教訓を踏まえた研究や免震の仕組みに興味を持ち、教員に対して活発に質問をしていました。

本学では、今後もこのようなプログラムを通じて日本の科学技術や日本留学への関心を高めるとともに、海外から優秀な留学生を積極的に獲得するため、本学の魅力を海外の高校生に発信していく予定です。



集合写真（3列目右端：宮川副学長、3列目左端：杉浦教授）

（国際・共通教育推進部（留学生支援課））

[目次に戻る ↗](#)

2023年度夏季アジア未来リーダー育成奨学金プログラム (AFLSP) 成果報告会を開催

本学主催による、アジア未来リーダー育成奨学金プログラム (Asian Future Leaders Scholarship Program、以下AFLSP)*の第8回目となる2023年度夏季成果報告会を7月23日(日)に開催しました。

はじめに、平島崇男 大学院教育支援機構長から開会の挨拶があり、本学が参加してから10年目を迎える本プログラムの目的や、本学奨学生の研究・社会活動の成果を発信する場として本報告会を開催していることなどが述べられました。

続いて、趙 亮 総合生存学館准教授および張 凱淳 工学研究科講師による運営のもと、5名の奨学生が自身の研究成果や社会貢献活動などについて報告を行った後、2022年4月から開



成果報告会の様子



集合写真



始した、奨学生が4～5名のチームで研究を行うTeam-Project Based Research (T-PBR) の研究成果について、各チームが報告を行いました。

発表を受けて、各審査員より講評があり、優れた取り組みおよび発表を行った奨学生とT-PBRの最優秀チームに対し表彰を行いました。審査員からは、文化の多様性に触れ、協力し合うことの大切さや自分の専門分野以外にも目を向け、より多くの活動に参加することが必ず将来に役立つといったメッセージが述べられました。

本プログラムを通じて、学生たちが交流し、文化の多様性についての理解を深め、世界で活躍するリーダーとしての資質を育む機会となることが期待されます。

※アジア未来リーダー育成奨学金プログラム (Asian Future Leaders Scholarship Program)

アジア太平洋地域内での、海外留学を望むアジアの若者たちを支援し、異文化間理解を深め、将来のアジアおよび世界の友好・発展に寄与する人材を育成することを目的として、百賢亜州研究院 (Bai Xian Asia Institute) が主体となって2014年より実施が始まりました。京都大学を含む日中6大学がパートナー大学として選ばれ、毎年100名程度の奨学生を受け入れています。本学では毎年約10名の奨学生 (修士課程留学生) の受け入れを実施しています。

【関連サイト】

Asian Future Leaders Scholarship Program at Kyoto University | AFLSP@KU

<https://www.aflsp.kyoto-u.ac.jp/>

Bai Xian Asia Institute

<https://www.bxai.org/>

大学院教育支援機構

<https://www.kugd.k.kyoto-u.ac.jp/>

(国際・共通教育推進部 (留学生支援課))

[目次に戻る ↗](#)

「京都大学宇治おうばくプラザ第12回たそがれコンサート」を開催

6月9日 (金) に宇治キャンパスの宇治おうばくプラザにて、「京都大学宇治おうばくプラザ 第12回たそがれコンサート」を開催しました。本コンサートは、本学と地域の方々との交流を深めることを目的として、2010年度から開催しているものです。

当日は約260名が来場し、はじめに中北英一 防災研究所長による開催挨拶および連携協定



開催挨拶をする中北防災研究所長



来賓挨拶をする松村市長



閉会挨拶をする山本生存圏研究所長

部局の
動き

を締結している宇治市の松村淳子 同市長による来賓挨拶がありました。その後、第一部に宇治市立東宇治中学校吹奏楽部、第二部に京都府立菟道高等学校吹奏楽部がそれぞれ演奏を行い、来場者は熱心に耳を傾けていました。

最後に、山本 衛 生存圏研究所長より閉会挨拶があり、本コンサートは盛況のうちに幕を閉じました。



東宇治中学校吹奏楽部による演奏の様子



菟道高等学校吹奏楽部による演奏の様子

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

宇治キャンパスと宇治市との連携協力懇談会、夏休み親子理科教室ほか、関連行事を開催

宇治キャンパスでは、2014年11月に宇治市と連携協力に関する協定を締結し、それ以来、教育、研究、防災・災害対応、広報などの分野において相互に協力し、交流を深めてきました。このたび、本協定に関連する行事を、7月26日(水)、28日(金)、8月3日(木)にそれぞれ開催しました。

7月26日には、宇治キャンパス総合研究実験1号棟にて、「第7回連携協力懇談会」を開催しました。宇治市からは、松村淳子 同市長をはじめ関係部署の部長などが出席し、本学からは、宇治地区研究所世話部局長の中北英一 防災研究所長、青山卓史 化学研究所長、森井 孝 エネルギー理工学研究所長、山本 衛 生存圏研究所長、山口 悟 宇治地区事務部長のほか、各研究所事務長が出席しました。懇談会では、宇治市内在住の小学生を対象に行っている「夏休み親子理科教室」などの教育関係事業の実施状況や今後の方向性、宇治おうばくプラザきはだホールの活用、宇治キャンパス周辺的环境整備などについて幅広く意見交換を行い



連携協力懇談会の様子



連携協力懇談会参加者

部局の 動き



超高分解能分光型電子顕微鏡棟の見学の様子



材鑑調査室の見学の様子

ました。懇談会の後、施設見学が行われ、化学研究所超高分解能分光型電子顕微鏡棟では治田充貴 化学研究所准教授から、生存圏研究所材鑑調査室では今井友也 生存圏研究所教授および反町 始 同研究所技術専門職員から、それぞれの施設で取り組んでいる研究内容の紹介がありました。

7月28日には、「夏休み親子理科教室 in 京大」を宇治おうばくプラザきはだホールにて開催しました。本教室は、親子で本学の最先端技術研究の一端に触れ、理科への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材を育成することを目指して、宇治市内在住の小学校5、6年生児童およびその保護者を対象に開催しています。今回は、梅村研二 生存圏研究所教授が「SDGsに貢献する環境に優しい木質材料をつくる研究の話」と題して、日本と世界の森林の状況の違い、そして木質資源の有効利用を目指した研究として農産廃棄物を原料に用いた木質材料の開発に関する講義を行い、31組62名の親子が参加しました。講義の後に行われた質疑応答では、児童および保護者から、「講義の中で説明があったクエン酸と砂糖を使った接着を夏休みの自由研究として家でもできないか」、「研究で失敗した時にはどうやって乗り越えてこられたのか」など、活発な質問が寄せられました。



夏休み親子理科教室の様子



講義する梅村教授

8月3日には、「中学生理科教室」を宇治キャンパス北4号棟大会議室および Heliotron J 実験室にて開催しました。本教室は、科学の最先端の研究に触れることにより、科学への興味を高め、科学技術に夢と希望を持つ人材育成を目指して、宇治市立中学校の理科(科学)部員を対象に開催しています。今回は、「プラズマの虹は、どんな色?」と題し開催しました。南 貴司 エネルギー理工学研究所准教授および門 信一郎 同研究所准教授を講師として、分光器を手作りし、プラズマの虹のスペクトルを観察して温度を導く実習の後、核融合エネルギー実験

部局の
動き

装置「Heliotron J」の見学、1億度にもなるプラズマの温度の測り方などの説明がありました。本教室には宇治市内の3校から33名の生徒が参加し、講師やサポートの大学院生との間で、科学への探求心に満ちた質問が飛び交いました。



中学生理科教室の実習の様子



Heliotron J の見学

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

あの日に帰りたい

平松 哲郎



7月のある日、以前より予定していた脳科学者小泉修一先生による演題「あの日に帰りたい／脳は若返るのか」という講演会に出かける直前、本寄稿の依頼があった。「学生時代ろくに勉強をしなかった」と謙遜される方は多いが、その点人後に落ちない私に執筆の資格なしと即座にお断りをお断りと思ったが、期せずして「あの日に帰りたい」の話を知ると「あの日に帰って文章を書くように」という話が同時に起きた偶然に、我ながら苦笑しお受けすることとした。

講演の内容は、門外漢の私の勝手要約では“脳機能に重要なグリア細胞をリセット・移植し若返らせることで若かった頃の柔らかな脳に戻ることが可能。グリア細胞は（我が母校京大の誇るべき研究成果である）iPS細胞から作成できる”というもの。一方私にとって「あの日に帰りたい」といえば、何といても「泣きながらちぎった写真を・・・」で始まる二回生の頃に大ブレイクしたユーミン。「いちご白書をもう一度」などこの時期の彼女作による一連の曲は、今の若者にとってきっと半世紀前の超懐メロでしょうが、学生運動の残り香など当時の世相を感じさせる作品群である（歌中の男女の機微を語る部分は残念ながら私には無縁だった）。今でもこの頃のユーミンを聞くとできるなら大学生にもう一度戻りたいと強く感じる。

それではなぜ人生の中でもとりわけ大学時代に戻りたいのか、改めて自己分析をしてみると大きく2つ。1つは（これは大きな錯覚だったが）時間は限りがなくたっぷりあると思う中、様々なことをゆっくりと自由に経験できたこと。夜ごと夜ごと学生相手の居酒屋や誰かの下宿に集合し、夜を徹して何だかんだの議論、勿論マージャンも。ワンダーフォーゲル部に所属し全国各地を鈍行列車やヒッチハイクで歩き回ったが、色々な光景を見たり土地土地の人から思わぬ人生訓を得たり。2つ目は後悔、やっぱり授業はもう少し真面目に出席すべきだった、あれほど素晴らしい先生方の講義を聞く機会が与えられながらその大半を自ら放棄したことは今更ながらもったいない。「♪あの頃の私に戻って講義を聞きたい」

そして私なりにこの頃強く思うこと、それは社会人として必要な根源的な倫理観や良心という類いは頭の柔らかな時代でこそ多くを吸収出来て、学生の頃にかかなりの部分が構築されるのではないかと。講義は勿論、先生方との雑談やその醸し出す雰囲気などから色々なことを感じ、スケジュールに追われずしがらみの少ない時間、空間の中で純粋に反芻思考し時には熱い議論をすること、この様なことから倫理的思考の枠組みが本人も気づかず構築されていくのではないかと。iPS細胞について多方面での活用が期待されているが、そこに至るには人とは何か類する倫理的問題が未だ残るとのこと。また近時「論語と算盤」という渋沢栄一翁の存在が再認識されているように、経済活動において利益至上主義がもたらす問題は度々論じられてきた。後輩達には生涯に亘ってこのような事柄に的確に対処できる豊かな人格形成をして欲しいし、それを体得する大学の環境が維持されることを願っている。

私も若い頃の柔らかな脳に戻りたい、でもiPS細胞活用は私には間に合わなさそうだ。

（ひらまつ てつお、中央日本土地建物株式会社特別顧問、昭和53年法学部卒業）

[目次に戻る](#)

随想

松本亦太郎博士の贈り物
—ヒップのクロノスコープ—

名誉教授 苧阪 直行



私が所属していた文学研究科実験心理学教室は、文系ではなじみの薄い「実験」という名前を冠して、心の研究の歴史を文学研究科の中で刻んできた。「実験」が重視されるようになったのは、19世紀の後半に欧米で、哲学的な思弁を避けて自然科学的方法—実験—による知識の体系化を目指す新しい心の科学として実験心理学が誕生したこととかかわりがある。そこでは、心の働きを精密機械によって測る新パラダイムが導入されたのである。1879年にはライプチヒ大学に初めて心理学の実験室がつくられ、自然科学的方法が採用されてからは精密機器の導入による心の探求が、その後の世界的な潮流となった。

ちょうどこの時期に、東京帝国大学に次いで京都帝国大学に心理学講座が創設された。初代教授として着任した松本亦太郎は、ライプチヒ大学から29年遅れて、1908年10月に木造108坪の実験室をつくった。彼は、欧米で実験心理学を学んで帰朝したばかりの43歳の気鋭の学者で、実験室の東南の一室に時間計測室を設け、文字等の視覚刺激を瞬間提示してその感覚・知覚に要する反応時間を計測したのである。意識の働きを時間の窓を通して科学的に観察した実験だといえる。刺激の提示には振り子式瞬間露出器が、反応時間の測定にはミリ秒単位で記録できるドイツの時計職人ヒップの考案によるクロノスコープなどが使われた（総合博物館企画展「創造と越境の125年」（2022年）に展示された）。ヒップのクロノスコープの計時は錘の落下と歯車の回転の動きに応じて作動する機械仕掛けによるにもかかわらず、ミリ秒の計時精度を生みだしている点は驚きである。亦太郎は、心の働きは動作により分析できると考え、サイコキネマティックス（精神的動作学）と呼ぶ身体と心の学問を提唱し、1914年には著書「精神的動作」を刊行している。動作を刺激観察と弁別反応に必要な時間要素に分けて捉えるメンタルクロノグラフィーの思想は、その後の実験心理学でも取り入れられ、複雑な認知も時間要素を加算してゆくことで心の働きが解明されたと考えられた。

心の時間を測るこれらの古典機器の多くは、19世紀末にライプチヒのツインメルマン社でつくられた職人芸を極めた芸術品で、幾多の消滅の歴史を免れた遺産として、幸いにも教室で維持修理され、保存されてきた (<https://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/museum/Contents.html>)。世界でも京大のみに残存している一万分の一秒で反応を記録できる時間記録装置（心理学者ヴァント考案になるクロノグラフ）など多くの貴重な装置が残っている。117年前、亦太郎によってもたらされたこれらの歴史的古典機器の数々は、彼が教鞭をとっていた東京高等師範学校の心理学教室創設に向けてドイツ等から買い集めていたものであったが、京都を実験心理学の一大拠点とするべく、その教室創設に向けて当時の校長であった嘉納治五郎の許可を得て、急遽振り替えたものと伝えられている。ヒップのクロノスコープを含む古典機器群は、亦太郎の京都への着任がもたらしたお土産という来歴を併せもち、現在もおおよそ34品目が古典機器遺産として教室に残されている。亦太郎の贈り物は、その後の新しい心理学を京都から生み出す手立てになったと考えられる。現在、私はその記録を残すべく務めているが、その保存の場所にも問題が残されている。

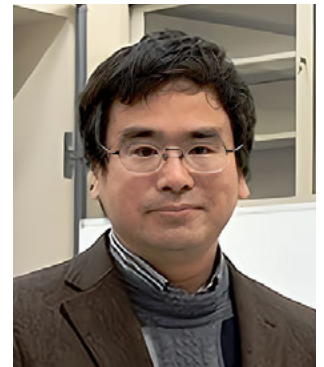
（おさか なおゆき、平成22年退職、元大学院文学研究科教授、
専門は実験心理学、認知科学）

[目次に戻る ↗](#)

洛書

未開発の太陽光で
社会を照らす

坂本 雅典



私は赤外域の光を電気エネルギーや化学エネルギーなど人類に有用なエネルギーに変える研究を進めている。太陽の光は、地球上のすべての生命の源泉であり、人類、動植物すべてが恩恵を受けている。赤外域の光は太陽光全体のおよそ半分を占める光エネルギー資源であるが、現時点では有効な利用法がない。赤外光エネルギーの利用法が開発されれば、従来の光合成や太陽光発電などに匹敵する新たなエネルギー資源を人類にもたらすことができる。また、太陽電池など現行の太陽光利用は可視光を対象としているため、植物の光合成と競合してしまうが、赤外光は光合成と競合しないため、自然と共存したエネルギー生産を実現できる。

研究を始めてから数年は思うような成果が出なかったが、2019年に赤外光を吸収するヘビードープ半導体ナノ粒子を利用する事により、世界最高の効率で赤外光エネルギーの変換を行う事ができることを発見した。当時の学生(現 上海理工大学 Zichao Lian 教授)とこの成果を出した際には、何度も追試を繰り返して最後には怒らせてしまったが、結果は間違いなく、これが大きな転機となった。

赤外光エネルギー変換の技術を社会に還元するためには、大学と社会をつなぐ架け橋が必要である。このため、赤外域の太陽光で発電する窓ガラスの開発を行う株式会社 OPTMASS (<https://optmass.jp/>) を2021年に設立した。(株) OPTMASSの社名は「光資源」を意味しており、前人未到の赤外光エネルギーの資源化を使命としている。赤外光は目に見えないため、赤外光を吸収する材料も透明にすることが可能である。この透明性を活かすことで窓ガラスの代替品となり得る透明な太陽電池を開発する事が可能になった。

(株) OPTMASSの目指す発電窓ガラスの技術は、都市を「消費と環境破壊の拠点」から、「エネルギー生産と環境保護の拠点(森)」に変える転換点になると期待している。産業革命の昔から、都市における人類の消費活動は地球環境に大きな損害を与えてきた。我々の時代において、その負債は取り返しのつかない領域にまで到達しようとしている。「街を森に」変える(株) OPTMASSの挑戦は、都市をエネルギー消費の場から、エネルギーを生産し環境を保全する場所に転換するための歴史的な一歩になると強く信じている。

これまで平坦な道ではなかった。赤外光エネルギーの研究に取り組み始めた時期に、「絶対にうまくいかない」と言われたことは今でも覚えている。打ちのめされ、挑戦をやめてしまおうかと思ったこともある。ただ、それ以上に、夢に共感して下さる京都大学内の様々な方の応援があり、何度も苦境を乗り越えてここまでやって来ることができた。まだ道半ばであるが、自然科学への畏れを忘れず、未開発の太陽光で人々の生活を照らすという信念をもって歩いていきたい。

(さかもと まさのり、化学研究所准教授、専門は光化学、物理化学、材料化学)

[目次に戻る ↗](#)

話題

学術機関の認証連携基盤に関する表彰「IdP of the Year 2022」を受賞

本学は、5月30日(火)に開催された国立情報学研究所学術情報基盤オープンフォーラム2023の認証セッション2において、国立情報学研究所が提供するサービスの一つである学術認証フェデレーション「学認」から「IdP of the Year 2022」を受賞しました。

学術認証フェデレーション「学認」とは、学術e-リソースを利用する大学、またそれらを提供する機関・出版社などから構成され、相互信頼を構築するための連合体であり、「IdP」とは、学術e-リソースを利用する大学などにおいて、所属する構成員に対し行う利用者認証の結果を、他機関と連携するために運用するサーバ (Identity Provider) にあたります。

本学の情報基盤の整備を行う情報環境機構では、構成員が学内外の情報サービスを利用する際に、その起点となるID情報を提供するためのIdPとして、全学共通のアカウントを用いて認証を行う統合認証システムを運用しています。今回の受賞は、本学が多要素認証に対応する認証システムの設計と導入を通じ、高度な安全性と利便性の両立を目指す「次世代認証」の実現に取り組んでいることが学認から評価されたことによるもので、2022年度に特に模範的な役割を果たしたIdP設置機関として表彰されました。

情報環境機構は、今後も本学におけるICT基盤に対するさまざまなニーズに応えるべく、高度な次世代認証を実現する認証システムの導入を通じてさらなる学術情報の利用を促進しつつ、この取り組みを通じて得られた知識を社会に還元すべく努力してまいります。



学術情報オープンフォーラム2023における授賞式の様子



「IdP of The Year 2022」賞状

(情報部 (情報推進課))

[目次に戻る](#)

経営管理大学院が国際認証規格「EQUIS」を取得

経営管理大学院は、5月3日(水)に、経営学に関する高等教育機関(ビジネススクールなど)の国際品質評価機関EFMD (European Foundation for Management Development、本部:ベルギー・ブリュッセル)から、国際認証規格「EQUIS[®]」を取得しました。国立大学法人としては初めての快挙となります。

今回の認定は、審査団による自己評価報告書やインタビュー評価などの厳格なる審査および認証委員会による審議を経たものであり、実務世界との強いつながりを通じた各分野における研究・教育の高い品質などが特に評価されました。

話題

EQUISの取得を受け、6月11日～13日にフランス・リヨンで開催された「EFMD Annual Conference」において、同院はEQUISアワードを受賞しました。

※ EQUIS

世界三大認証(EQUIS、AACSB、AMBA)の一つであり、経営学に関する高等教育機関を10主要分野(ガバナンス、プログラム、学生、教員、研究、エグゼクティブ教育、資源と管理、国際化、倫理・責任・持続可能性、実務とのつながり)で評価して高い品質を持つ機関として認定するもの。

【関連リンク】

EFMD Global

<https://www.efmdglobal.org/>

Graduate School of Management, Kyoto University is EQUIS accredited - EFMD Global blog

<https://blog.efmdglobal.org/2023/05/24/graduate-school-of-management-kyoto-university-is-equis-accredited/>



EFMD Annual Conferenceにて
(左から、村上啓二 経営管理研究部特定准教授、澤邊紀生 同研究部長)

(経営管理研究部・経営管理教育部)

[目次に戻る ↗](#)

硬式野球部が秋田市で災害ボランティア活動に参加

8月10日(木)、秋田県大仙市で合宿中の硬式野球部の学生が、7月の半ばに豪雨で被害を受けた秋田市内でボランティア活動に参加しました。

部員たちは、秋田市社会福祉協議会を通じ、被害の大きかった地区で床上浸水



被災家屋の片付けを行う様子



被災家屋の2階から運び出す様子

話題

した住宅を訪問し、他のボランティアや地域の消防団と協力して、家屋に流れ込んだ土砂や瓦礫の運搬、家財道具の積み込みなどの作業を行いました。被災された方の安心した顔を見てわずかでも役に立てたんだと思えた半面、豪雨からひと月経っても残る被害の大きさや復旧作業の大変さも実感することとなりました。

硬式野球部は、翌日に秋田での合宿を終え、9月2日(土)から関西学生野球秋季リーグに参加しています。

(渉外部(広報課))

[目次に戻る ↗](#)